

小学生の頃から不得手な学科といえば一番に数学があった。あの算式が無機的で味気なく思えてなじめなかった。音楽も音痴であったし、譜面のオタマジャクシがなぜか数学に似ているように思え、なかなか覚えることができなかった。

まあ、並にはついていったが、これぞと得意なもののない中で、気が乗るといえば、野原や川原、小川などを相手に駆け回ることであった。魚捕りなどは大好きだったし、そこらにある草木などから遊び道具をつくる創作的なものには、気を取り出して時の経つのも忘れるほどであった。黙々と心向くまま誰の制約もない独りの世界にいるときが一番うれしく、これが性格に合っていたようだ。その一端として今の写真世界、今も続く六〇年余りのカメラの趣味世界となっている。

苦手だった数学の世界、数字の世界なのに、七〇歳を過ぎた今、日課となっているのが、偶然の一致という、神秘世界を考えるうえでどうしても避けて通れない「数字」が、心一杯に広がっているのだから、皮肉といえば皮肉なものである。ただ、数字といっても、算式を解くという学問上の世界ではないから、私にも受け入れられるということになる。

偶然の一致という現象を、偶然ではないのだといえるには、それなりの証明を出さなくてはならない。

ところが、科学には馴染まないこの神秘世界は、反復実験可能の世界ではないから、偶然ではないのだという証しは、体験記録によって、その中枢に近づかなくてはならない。

それが、「いのち(生命)とは何ぞや?」という大命題にふち当たったの模索となるから、数字が苦手だの、何が苦手だのとはいえないのである。

この世の一切がいのちそのものでありますから自分をとりまくすべてが「いのち」で充満しているのであるし、そのいのちのひびきはすべてが、意志性の心性の響きであるし、その心ごころのシンボル表現こそが、数字(数霊)であり、文字(文字霊)であり、色(色霊)であり、と考えられるのである。

人間が築き上げた科学技術の世界では、その基礎学問こそが数学だといえるほど、物理系の基礎は数学世界といえよう。

山形新聞のコラム欄「気炎」から引用してみると、

（前文省略）今年を「世界天文年」とする。「哲学（世界の基本原理）は、われわれの目の前に常に開かれている。この巨大な書物（宇宙）は数学という言語と三角形や円、その他の幾何学的図形という文字で書かれている」と宣言した、ガリレオの実践による現象の究明こそが近代科学の先駆けとなった云々（平成二十二年一月三〇日付け山形新聞）とある。

宇宙という巨大な書物は、数学という言葉と幾何学的図形という文字で書かれている、というのだ。

これを読んだとき、私の内奥からひよっこり覗くようにきらめく思いが湧いてきたのである。「数的世界は、万物万霊の共通語的意志伝達のひびきをもっている」と、確信めいた思いになったのである。

追いかけている偶然の一致というのは、単に偶然ではないのだ。心は生きているのだ。出会いの縁には、秘められている一つの流れがあるのだ。そう思ったのである。この世は、意志的エネルギーの流れで満ち溢れているのだと考えて、何ら不思議ではないのである。

私たちは、目に見えない心霊世界を、目に見える文字・数・色・を共振共鳴の媒体エネルギーとして、この世の魂の意志エネルギーを、この目で見ているのだと、考えるようになったのである。

私の考える「いのち」とは、代謝エネルギーを中心とした躍動エネルギーと安定エネルギーの一大循環、すなわち、宇宙絶対調和力に括られている世界であるから、いのちの中枢を成すものは、数的（量的）に象徴される代謝エネルギーというほかはない。数的（量的）バランスこそ、いのちの中心力と思うし、数霊（数字に宿る意志性）は生死を越えて、心のひびきを発している。

この世は、生死共存の世界といえるし、この自分も、生死共存の魂の一生命体であるから、一人ひとりに現れる縁に秘められている数霊はもとより、文字霊・色霊をどのよう受け止められるか、または無視するかであって、その数霊の意志性を受け取ったとき、偶然という知見はおのずと消え失せることになる。「たまたま」ではなくなるのである。

心の博物館ともいえるこの自分のいのちでは、心に古いも新しいもなく生きているし、そして、出会いの縁には、秘められている魂の流れがあつて、その現れとしての数霊であり、文字性の響きであるといえる。

今をせわしく生きている普段の生活の中では気づかないだけであつて、いのちの中では別世界のように、心（靈魂）の共振共鳴が休みなく働き続けている。

ここで、数字が示すメッセージ性として、数字には魂が生きていくということ、その意志性を暗示する共時性現象を紹介してみようと思う。

昭和五七年一月一二日、二人の叔母姉妹の間で、姉を養母としての養子縁組が結ばれた。ところが、それより一年後の昭和五九年一月四日四時五二分、養母の叔母が亡くなり、寺も墓もないから、生家の墓に納骨することになった。

養女の叔母はこれからのことを思い、永代供養の法要を行うことにして、生家を訪ねたのは、養母が亡くなってから八年目の平成三年一〇月一二日のことであつた。

生家の村には、叔母の同級生が四名いて、当日は永代供養を済ませてから、その同級会にも出席する予定になっていた。

私たち三人で出かけた菩提寺での永代供養を終えてから、同級生の一人、志田宅に立ち寄ることにして、叔母とはそこで別れることにした。

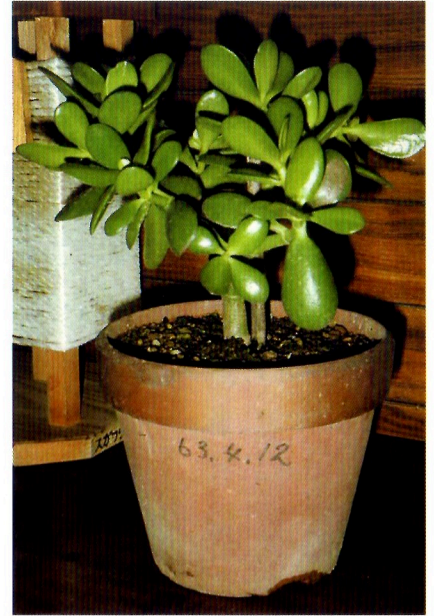
志田宅は、生家の三軒隣であつて、古くからの付き合いであり、遠慮のない間柄である。叔母を置いてから帰りぎわのこと、縁側にある沢山の鉢植えに目が留まった。特に、肉厚の観葉植物が根分けされている鉢に心を引かれたのである。聞くと、この植物は挿し木で簡単に根が付くといい、名前は「幸福の木」というから縁起物であり、心を込めて大事に育てているということであつた。

その鉢を一心に見入っている妻の姿を見ていたこの家の主人が、「一鉢あげるから持つて行きなさい」と言ってくれたので、妻は大喜びである。「この鉢がよかろう」と選んでくれた鉢を抱いて帰宅し、玄関の下駄箱の上で向きを見ながら鉢を回転していると、その鉢には数字が書かれてあつた。

六三、四、一一

という数字なのだがどうもそれが月日ではないかと思ひ、電話で聞いてみると、植え込みをした年月日であることが分かつた。

その日の話はこれだけのことであり、特にどうこうならないのが普通の生き方だろう



4月12日と記された幸福の木の鉢

一月一二日である。当日の一月一二日は、ちょうど一月早い「縁日」の一二日であったのだ。

一二日に養子の縁を結び、一二日に養母の永代供養の法要、四月一二日に植えられた幸福の木をいただくという流れ……。四月一二日が、私たちの結婚記念日ということは、どのように理解したらよいものか。そこに、必死に呼びかけている意志のひびきを感じてならない。無理に個人的に注釈をつけることは、むしろ真意を曲げるおそれを招くこ

ともなりかねないから、その意志のひびきを受け止める情感が大切と思うのである。

この日一日の一連の行動が、この世の現実としては、永代供養であり、それも、同級会と併せての叔母の来訪であり、幸福の木を授けてくれた志田家の奥様が、叔母の同級生であるということである。これにて一日の行動は終了だが、これはあくまでも、時計でいえば今何時分という針を見ていることと同じ現実にはすぎない。

ところが、正確にその時計の針を動かすには、目に見えない時計の中にこそ、その中枢本体がある。肝心の針を動かすこと、それも正確無比に動かし続けてくれる本体が、目には見えない中に組み込まれているのである。

魂に生死の境はなく、心は生き続け、生死は不離一体で魂は不滅、心に新旧はなくピカピカ輝き生き続ける。

積み重ねられてきた心の集積、心身一体のこの自分、死んでも生きている心（魂）の本体こそ、縁ある魂と共振共鳴して、縁ある魂がこの身に生きて、数霊を介して、文字霊を介して、色霊を介しての、今日なる現実を動かしているのである。

現実を動かすいのちの本体は「心」、靈魂なのである。この日の現実を動かす原動力となっているいのちの本体、それは精神体であり、心性であり、心であり、魂といえる

とは思うが、共振共鳴の共時性現象を探索する者にしてみれば、その数字一つ目にするだけで、心躍り上がることもなるのだ。四月一二日は、私たちの結婚記念日である。そしてこの日は、一月一二日。

「四月一二日と一月一二日」。それのみか、永代供養のご本尊である叔母姉妹が養子縁組をした日が昭和五七年

ものであり、表現の文言の違いはあっても、すべて同義であると私は理解をしている。養母の叔母は、縁者のいのちの中で、生者の世界を見ている。人々の行動の原動力となって、また、言葉の発信体となって、その証しを数霊に示しつつづけて、いのちの中で生き続けているのである。

生命8字は心の宝

心の波調を限りなく微細に絞り込んで、集中力を高めようとする。その集中度の個人差がある中で、各人が、それらの思いを寄せたところの、心の磁場において、はっと何かを知覚する瞬間がある。それはあの、魚を釣り上げる一瞬にも似て、心が何かと見事に同調する体験は得難いものである。

それは、黄金の神域から発する微細な光の糸と結ばれる一瞬なのかもしれない。そんな体験は誰にもあることであろう。

心のある一点に絞ったとき、心のサイクル同調が成立したとき、その一瞬の出会いが宝、いのちの宝である。

私は五二歳で断酒禁煙してからというもの、自分の心の世界に没入することになり、はや二三年を経過して、そこに一つの命題が浮き上がってきた。



鳥海山の山頂にて（筆者と妻）

星すべてのいのちと等しく輝くいのちである。

次々と原始の世界に夢、心地で思いを進めるなら、億兆の星をかかえている宇宙生命に結ばれていることを思い知らされる。私たちの小さないのちのルーツは宇宙生命以外にはない。極微の自分のいのちには極大の宇宙が宿っているのです。幼稚園児にも分かるようなことを命題に据えて、私は、いのちというものを考え続け、答えなき苦戦の真っ只中でした。

いくら考えても考えは堂々めぐりとなり、始発駅の自分に戻され、理屈では分かかっていてもそれは観念上の思いに過ぎず、いのちとは何ぞやという答えにはならない。ブーメランのように円を描いて手ごたえなく戻ってくるのである。

いのちという言葉紡ぎ出したのは誰なのだろう

「いのちとは何ぞや」

ということである。

今生きているこのいのちとは何か？ 心を持ったこの肉体とは何を意味するのか？

そう考えるようになった。

そして、一人ひとりから集団を成す社会となりエネルギーを高め、ある一方向に進もうとしている人類世界。その人間社会の流れは、時代の流れとなつて進む。

一体このいのちというものは何をもってこうあらねばならないのだろうか…と考えを回す。そうした思いは、生きているかぎり、命あるかぎり尽きることはない、不思議なことである。

いのちとは一体どういうものなのか、知りたいと考えあぐねて堂々めぐりの日々を過ごしてきた。私のいのちは確かに両親からの引き継ぎであり、その先々のルーツを辿れば、最初の最果てはわれらの地球に突き当たる。生命母体の地球生命に引き込まれていくのである。

いのちの光は、万人が絶対的に等しい光のほずである。そして、自分のいのちはイコール地球のいのちである。また、地球のいのちは太陽のいのちである。太陽のいのちは惑

か。いのちの文字を人の世に提供してくれたのは誰だろうか。知りたいものである。人の世にいのちなるひびきを持ち出してくれたのは、人に非ずしてのお方なのかもしれない。宇宙生命の、ただ一点の、絶対なるお方なのかもしれない。そのお方こそ、万物万人のいのちの中心に御座して、そのいのちのひびきを発しているに違いないのである。

いのちの中のただ一点のいのちの中心に、もしも、自分の心のチューナー（心の同調装置）で、その超微細な波動をキャッチできるならば、いのちの何たるかが分かるような思いに包まれたことがあった。

それは、五人で烏海山登山を終えた翌日の平成三年九月二六日のことであった。

電話台の上に二枚のメモ書きが置かれていて、何であろうかと読んでみると、それは、妻が書いた「いただきもの」という文章だったのである。

そのメモ書きは、前日の登山中に記した文章のようであり、その内容は難解な部分が多くてストリートには理解できないのが正直なところであった。しかしそこには、奥深い言葉のひびきが秘められていて、あとになってその真意が分かることが多いのも事実であった。奥深い心の磁場から、光のうねりとなって結ばれた心結びとでもいうことが

できよう。

その当時は、私もいのちを探しに日々考えあぐねていたときのことである。その二枚のメモ用紙には次のような文章が記されていた。

“八をおぼえ祈る

言葉の愛が

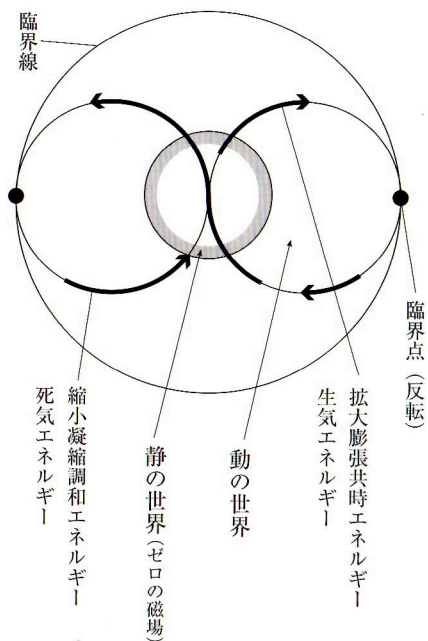
枝につく幸せ

平成三年九月二五日五時二五分

その言葉の真意のひびきをどう受け止めて理解を深めるか。すぐにはピンとこなかったが、“八をおぼえ祈る”という、その「八」という数字を見たとき、血の気が一時停止したような静止感に包まれたのである。さらに二枚目の紙には、

“心の愛が生む力

積とぎの幸せ



【生命8字還流】

妻のメモ書きから発した生命8字還流こそ、私のいのちを考える上での土台となったというのが、率直なところである。この、九月二六日の妻のメモ書きから触発されて考え出したいのちのシンボル図形の8字還流と

鳥海の山

平成三年九月二五日五時二八分

とあった。

メモの一枚目に出てくる「八」という漢数字が、私を奇想天外な発想に結びつけるビツクリ箱になった。メモの二枚目には「鳥海の山」が出てくる。「八と山」が一体化し、「八」の形状が山の姿となり、「山」の形状が「八」の漢数字となって目に映ったのである。

心の場面ががりりと一転し、宇宙生命の本質エネルギーは「8字還流」になっているのだと、激しく心が突き動かされたのである。

実に他愛のない発想のだが、それが、嘘から出た真のような話で、後年私は、この円形8字に、さらにその中心にゼロの磁場を入れて「生命8字還流」と名付けた。マクロの生命宇宙からミクロの原子生命単位までも、根源的生命エネルギー磁場を秘めているのだと、考えるようになったのである。

8字還流というとき、二つの渦状の、生成消滅エネルギー対流にもイメージできるし、円の中心には、絶対静の慣性場（ゼロ磁場）を配して、共振共鳴の共時性現象（縁のメカニズム・俗称Ⅱ偶然の一致）の生気エネルギーと死気エネルギーが織り成す世界だと考えるようになった。

生気エネルギーは、拡大エネルギーとも共時エネルギーともいえるし、死気エネルギーは、縮小エネルギーとも調和エネルギーともいえるいのちの二大エネルギーだと私は考えている。すなわち、いのちのシンボル図形「生命8字還流」を示す流れとなっている。

そっくりの図形が後日、テレビで報じられたのである。

それは、一月後の一〇月二七日にNHKで放映された番組であった。私は凄い衝撃を受けて、背筋に電流が一気に駆け上がった。夜九時からのスペシャル番組、『アインシュタイン・ロマン』の中で、宇宙の謎を解く究極の理論に迫った一人の学者が示す宇宙の図形に、共振共鳴したのである。なんと一月前に、妻の二枚のメモ書きに触発されて私が書いた生命8字還流の図形とまるでそっくりなのである。

学者は、そもそも宇宙は最高精神が創造したもののだと語ります。そして、

宇宙の流れは数字の「8」の字で表すことができる、円に「8」を書いて表現していたのである。それはまさしく、宇宙生命であり、その意志性を紹介してくれた番組であった。九月二六日に、妻の文章から発して生命8字の図形となり、一月後の一〇月二七日に、そっくりの8字生命図形を目の前にした衝撃は激しいものであった。

心は光である。心は宇宙意志を物質化させる光のエネルギーなのだと考えても不思議ではないのである。

自分から発する心のサイクルと、集中する磁場のエネルギーが、同調できるただ一点のゼロの磁場で、時空を越えて、現実のこの生活の場で、目に見える姿となって共振共鳴が起きているのだと思っている。

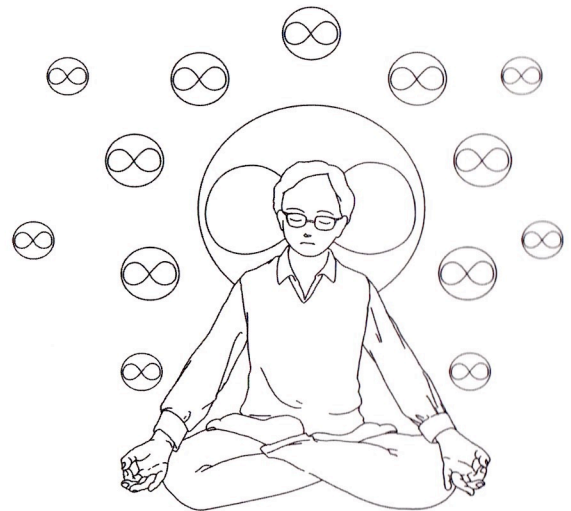
心は光です

心は物質化します

心は運勢運命のカギを握る舵取りです

心は宝です

命の宝なのです



平成3年10月27日NHK テレビ画像をイラスト化 (宇宙の謎を解く究極の理論)

お茶が牛になるとき

いのちには顔がある、と思うようになってから、その思いと体験記録が積み重なり、ついには「いのちの顔」というフォトエッセーを出版するまでに発展した。

いのちの顔といっても何のことかさっぱりぴんとこないかもしれない。生物に顔があるのは当たり前だが、そういう見かけとはちよつと違う話で、心の顔とでもいえばいいのか、生き物たちの顔とは無縁の場面に現れ出る顔なのである。

それは、いのちの底から浮き出した顔であり、誰の目にも映る顔ではない。

主に雲や食物、樹木、山、水、雪、氷、岩石、写真、布地、その他、そのときそのときの状況に応じて、万物にわたるのであるが、その顔の要因は随所に秘められているようで、とにかく、その一瞬の出会いのときに背中を押されるようにして写真に残してきた。

私には、顔だとはつきり分かるのだが、人にその写真を見せると何のことかさっぱり分からないようである。「これこのようですよ」と説明するとようやく分かってもらえるが、疑いの心が先に立つようだ。しかしそれは無理もないことである。目に見える顔以外に顔があるなど考えられないであろう。私には六感をつき動かしてそれとなく示唆し、案内するいのちのナビゲーターがおられるのだろうか。

この世に顔のない生物なんていないと思う。地球上には、二〇〇万種にも及ぶ生物が存在するといわれているが、とりわけ、顔があるかないかということになれば、植物を除いて、顔のないのつぺらな生き物はいやしない。

身近な庭先をちよつと覗くだけでも、蟻やトンボ、蜂や蝶々、カマキリにカエルや蟬、蚊、蠅、それから名前も知らない虫たち、雀、カラス、空にはトビが舞う。ときには、鶯やモズ、シジュウガラも見かける。四つ足でいえば、野良猫が縄張りにして庭のあちこちに臭いづけをしているし、犬も来るし、タヌキの親子が徘徊するし、思い起こすだけでも大変な数になる。皆それぞれ固有の顔を持っているから見分けがつくというもので、顔がなかったらお手上げとなる。こんな当たり前のことに、今さらながら、改めて不思議でならない。

顔とは何であろうか？ はたと考えてしまうのは私なりにそれなりの理由があるからなのである。目に映る生き物以外の顔を見てしまうので、「あれ」と心引かれて見れば、肝を冷やすことも少なくない。

目で見えるだけでなく、写真にも映る顔であるから、ただごとではない。そうして、ありようもないはずの顔が出現することが現実体験として続いてきた。まあ、漫画やイラスト等であれば、顔を表現するのに、丸に点を三つ入れるだけでそれが顔だとわかる。とにかく生物は、たとえ微生物であっても、顔のないものはいやしない。

顔には、その生物のいのちそのものが集約することに気づく。その生物が生きるための全身機能を集約している頭脳の、内面の出先としての表面機能が、顔の働きに当たる。

顔がないことは、首から上の頭脳がないことになる。生物としては成りたたない。目や鼻や口や耳などはいのちの象徴である。だから、「顔」を用いて、日常の話の中にいろいろと出てくるではないか。

■あの人は「顔役」だ：顔が何かの役を持っているようだ。

■皆さん、「顔が揃った」ようですから：手足が揃ったでは様にならない。宴会など

でよくある場面である。

■「顔をきかす」：何の薬なのか何に効くのかおかしな言葉である。

■「顔を立てる」とか「立てない」とか：顔は初めから立っているし、口が上になつてはいない。

■「顔を売る」：顔を売ってしまったら首なし人間になって一巻の終わりである。

■「顔に泥を塗ったな」と叱られる：建物の壁じゃあるまいし、顔が泥で見えなくなるから怒るのか？

■「顔が広い」とか「狭い」とか：顔が広くても知れたものである。せいぜい団扇^{うちわ}くらいがいいところである。

■ちゃんと「顔に書いてある」：顔を黒板と間違えているような話である。

等々、こうして顔を何らかの比喻にたくさん利用していることからして、まさしく顔は心のシンボルだし、いのちのシンボルということになる。顔は、個体の自己表現の絶対的なものといえよう。顔一つで心の内を伝えることができる。顔はまさしく心の象徴であり、いのちのシンボルでもある訳である。

これらの顔は、普段目にする生物界の顔となるが、私がいいたいのは、そういう既製

の顔ではない。いわば臨機応変の魂の伝達手段としての「霊顔」といったらいいかと思うのである。

その顔は、神秘的世界であり、メッセージ性の高い魂の再現といえると思うのである。目には見えない魂の物質化現象の顔ということ。声も言葉もないけれど、いのちの原子次元からの働きによって、沈黙の声を伝えようとしているいのちの顔。

霊言を伝えようとする、霊魂の存在を証す、魂不滅の「霊顔」ということができる。メッセージ性の高い万物普遍の次元からの「顔」ともいえる精神体の姿ではないかと私は思うのである。いわば「物言う原子」とでもいえる心の世界が物質化すると考えられるから、生物が持つて生まれた固有の顔ではないのである。人々の心と連動して、ある原子次元を誘導して、一瞬ともいえる即席の魂世界の創作活動とも言えそうである。強大な意志表現は、信じがたい顔（霊顔）を見せてくれるから、畏敬の感動を呼び起こす。

いのちの次元では、魂は不滅である。生物無生物にかかわらず、この世の全存在はいのちのひびきをそれぞれ持つていて、すなわち、心的固有波動ともいえる原子次元に連動しての意志伝達が開花して、顔の姿をもつてアピールしているとした私には考えられない。

それでは、心の物質化現象の一例を紹介してみよう。

フォトエッセー『いのちの顔』の一節で、私たちの生まれ故郷の旧友が久々に尋ねてきたときのことを引用することにする。

「お茶が牛となった」

インドでは、宗教的庇護のもと、街のいたるところでノッシ、ノッシと闊歩する牛。牛は仏様の使いなのか、神様の使い手なのか、牛は死んでからもその魂はこの世に物質化現象を起こすのか。また、人の思いが真に物質化現象を引き起こせるものなのか。あまりのリアリティーに息をのむ。

平成三年一月九日、旧友が久しぶりに訪ねてきた。祖母の代から使役してきた黒牛の話に一段と熱が入った。

身代の基礎をつくりあげたこの家の黒牛は、家宝として、親子代々にわたり飼い続けられたという。ことのほか、この黒牛には思い出が深いという。

胸を詰まらせて語ってくれたその方に、私は茶菓子を出し、お茶碗を手渡したその一

る。口は牛独特の広がり大きさをもっている。撮影してからしばらくすると、やがて形を崩して平面調になった。

この原稿を書き始めたのは、平成二十二年二月二五日である。念のために、この日は丑（牛）の日であった。また、台所では妻が、今日は菅原道真公の本命日だといって、一心に供え物の料理をつくっていたのである。道真公はご存じの通り、牛とは深い繋がりをもっていた。

思いは形をつくり、思いは魂を呼ぶ。心がいのちの宝なのである。



お茶がこぼれて黒牛の顔になった

瞬、数滴がこぼれ落ちた。なんとそこに、ありありと浮き出たのは「黒牛」の顔！物質化現象は紛れもない真実だ。魂不滅の謎に光明あれ。

以上のような話だが、皆さんは信じられますか？水には表面張力があるから、テーブルなどにこぼれると滲まなにかぎり盛り上がる。テーブルは塗装されているから余計こぼれたままの形となる。

カメラを持ち出して写すのだが、ストロボをたくと盛り上がっている水滴には陰影ができて、黒牛の姿を際立たせることにもなる。もう一度やってみただけ決して「牛」にはなならなかった。神意が働いたとしか考えられない。角が二本、目玉二つで白目と黒目、耳も向かって左はこちらにアンテナを向けている。右の耳は横の方に向けてい